
Lost Refrain

村間 涙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o s t R e f r a i n

【Nコード】

N 4 5 5 3 Z

【作者名】

村間 涙

【あらすじ】

豊かな国土を誇る一国、ソレイユ。

リーヴル領の公女ルイクはその呪われた歴史を背負うこととなった。最愛の兄との別れ、忌み子としての過去、そして彼女は旅立った。

兄を取り戻すため。

自信の運命を知るために。

1 (前書き)

バトルによる流血などの残酷な描写を含みます。
ご注意ください。

蒼天にそびえる館の一角、空中庭園で、一人の少女が剣を握っていた。

その向かい、十数メートル離れている場所には少女よりも幾何か年上の青年。

少女の名を、ルナイリス・キリク・リーヴル。

略した愛称でもあるルイクとも呼ばれる彼女は、このソレイユと呼ばれる国のリーヴル領の公女だ。

それに向かい合う青年の名はレグ・バークス。

リーヴルお抱えの騎士団の副団長であり、ルイク専属の護衛騎士である。

二人は練習用の木剣を構えて対峙していた。

「行くぞっ」

しばらくの沈黙をやぶったのはルイクだ。

真剣な表情に微かに緊張の色が浮かんでいる。それを払拭するように剣を中段に構えると一気にレグまでの距離を詰める。

レグは動じた様子もなく無表情なまま……余裕な態度でルイクの剣を受け止めた。

「くっ…」

力押しでは負けると察したのだろう、ルイクは剣を弾くと後ろへ二、三步飛び下がる。

「そんなものか、ルイク」

主従関係にあるにも関わらずレグの口調は碎けていて、態度もまるで大きなものだった。
いくらルイクがそれを望んだとはいえ、忠実な臣下たちが聞いたら気絶してしまいそうだ。

「うるさいっ」

かくいう彼女の口調もまた臣下からしてみればあまりよろしいものではないのだがー：ルイクは吠えるようにそう叫ぶとまたレグに詰め寄った。

数撃、弾きあうように剣を交える。

ルイクの額には汗が滲んでいるのに比べてレグは息一つ乱れていない。それが二人の力の差だった。

「終わりだ」

気付くとルイクは地に片足をついており、剣はルイクの手が届かない場所に転がっている。そしてレグの剣先はルイクの喉元にあてられていた。

ルイクは悔しそうに唇を噛みしめてキツと強気な瞳でレグを睨んだ。

「もう少し手加減してくれてもいいじゃないか！」

公女らしくないどころか女らしくさえない言葉づかいにレグは小さくため息をついた。ルイクの兄弟ですらこんな凶暴な言葉づかいはしないだろうに。

「ルイク、もう少し女らしくできんのか。第一、手加減したら練習にならないだろう。」

もっともなレグの言葉には全く反論できない。そういえばレグは剣の腕だけではなく口も達者なのだ。…悪い意味で。

「ああもうっ！明日こそはリベンジしてやるから！」

口でも敵わないと思うや否や、ルイクは立ち上がるとレグに対して細やかな抵抗…あっかんべをしてさっさと館の中へと入っていつてしまった。レグはそれを見送ると小さく口元を笑わせてルイクと自分の剣を拾い、それに続いた。

穏やかな、春の午後のことである。

2

「ルナイリス？」

ルイクとレグが屋敷に入ると穏やかな青年の声が聞こえてきた。

ルイクの正式名称、ルナイリスと呼ぶ人物は身内でも一人しかない。ルイクの実兄であり、リーヴル家の次期当主であるフェンライトだ。

「フェン兄様！」

ルイクはさっきまでの仏頂面を満面の笑顔に変えると階段を駆け下りフェンライトへと駆け寄った。その態度の違いのようにレグは苦笑を漏らす。

「また剣の練習か？」

「はい、レグに稽古をつけてもらっていました。」

フェンライトはレグに視線を向けると、申し訳なさそうな笑みを浮かべた。

「すまないな、レグ。またルナイリスに付き合わせてしまった。」

ルイクとは正反対の態度のフェンライトにレグはどこかむず痒いような気持ちになった。

フェンライトが嫌いなわけではないが、ルイクのように遠慮せずに接せられるほうがレグには合っているのだ。

それでも一応はリーヴル家に仕える身である。レグは無言のまま首

を振った。

「ルナイリス、あまりレグに無理をさせるなよ？それと…」

フェンライトはルイクに一步步寄りつくとその肩ほどにあるルイクの金の髪に指を滑らせ、

「お前自身、あまり怪我のないように。もう少し公女らしくしてもいい年頃なんだから。」

まるで恋人がするそのように、その髪に口づけた。

「はい、兄様」

ルイクはまったく抵抗することなく、むしろ嬉しそうに頷いた。
なんなんだ、このシスコンブラコン兄妹は。とレグはフェンライトにはばれないようにため息をつく。

ルイクは四人いる兄たちの中でフェンライトだけにはこうなのだ。

「それじゃあな。わたしはこれから父とグレセア領に行かなければならないんだ。」

フェンライトはそう言うときさつさとルイクから離れた。

ルイクは少し名残惜しそうに表情を歪めるも、公務を邪魔するわけにもいかず、結局口を閉ざしたままだった。そしてフェンライトのフェンライトの去ったホールに落ちた沈黙。

ルイクは無言で歩きだし、レグもそれに続く。

ルイクが止まればレグもぴたりと止まった。

くるり、とルイクが振り返る。

「なんで付いてくるんだ？」

「留守中はお前から離れるな、と言われているからだ。」

「誰に」

「リーブル公に」

「父様か…」

なんだその口ぶりは。お前の父親だろう。フェンライトだったらよかったのか。

レグは表情も変えずに胸の内だけで毒づいてみる。

大げさにため息をついた後、ルイクはきっぱりとこう言い切った。

「ついてくるな」

「無理だ」

しかしレグに間髪入れずに切って捨てられ、押し黙られざるを得なかった。

いくら剣を習っているとはいえ、ルイクはリーヴル家の公女である。他の兄弟はすべて男で、しかも全員それなりに武芸を習っており、またそこそこ強い。それに比べてルイクはまだ17歳の少女で体も華奢だ。

そんなルイクがリーヴル公の反乱分子から狙われるのはむしろ当然のことだった。

だからリーヴル公はレグというリーヴル騎士団の中でも一、二を争う剣の使い手を護衛としたし、それはルイクも自覚していた。

けれど、ルイクだって一応は年頃の女の子である。

こうも四六時中誰かに付きまとわれたらいい加減うんざりしてしまう。

そんなルイクの思いに気付いてか、レグは珍しく優しく微笑んだ。

「ルイク。俺のことは気にするな。空気のようなものだと思え。」

ピキ…とルイクの動きが固まる。

それが出来ないことはレグが一番知っているはずだ。

しかもその笑み。絶対に嫌味で言っただろう。

ルイクは引きつりながらも公女らしくにっこりと笑い、

「それが無理なんだってば！」

レグの虚をついて力いっぱい足を踏みつけてやった。

思い切り踏みつけたもののあまりダメージがなさそうだったのは、悔しいから気にしないでおいた。

1

夢を見る。

不思議な夢だ。

自分が、鏡に映った自分を見つめている、ただそれだけの夢。しかしルイクはなんとなくそれが恐ろしかった。

そのうちに鏡の形は崩れ、一つの銀の指輪になる。

無意識のうちにそれに手を伸ばし―：

そうして、目が覚めた。

ルイクはベッドの上で目だけを開け、またか、と一人ごちた。

最近はその夢ばかり見る。そして必ず、例の指輪に触れる前に目が覚めてしまうのだ。残るのは独特の気怠さだけ。

「はあ…」

そういえば結局昨日は最後までレグと言いつつたまま部屋に籠ってしまった。

気まずいわけではないが、やはり少し顔を合わせにくい。

幸い、今はまだ夜明け前のようで、あと数時間は一人きりの時間だ。ルイクはそつとベッドから起き上がると無駄に広い部屋を歩いて観音開きの窓を開けた。

冷たい空気が晒し出された肌を撫で、白いスリッパドレスを揺らす。それと一緒にルイクの明るい金の髪をさらさらと靡かせた。

ルイクにとって、この髪はコンプレックスだった。

リーヴル家は王家に次ぐ位の高い家柄なので、血を絶やさないう、親類同士での結婚が多い。従兄弟などでの結婚も珍しくなく、実際ルイクの両親もはとこ同士での結婚だった。

だからリーヴル本家は代々銀の髪を受け継ぐのが当たり前で、ルイクの金の髪はリーヴル家の中では異質なのだ。

特に両親は生まれてすぐのルイクを抹消しようとしたくらいに金の髪を毛嫌いしていた。

幸いフェンライトのお陰でルイクは生きながらえたが、両親に愛情を注いでもらったことなど一度もない。

なんでも、母方の姉妹の中に金の髪を持つ人がいたらしく（今は家を出てしまっているが）、その人がとんだ変人らしい。悪魔に魂を売ったとか、リーヴル本家を呪っているだとか、そういう噂は後を絶たない。そして使用人の中にはその伯母の存在を知る者もいて、そのためいつもルイクのことを「忌まわしき子」と陰口を叩く。

「はあ…」

それを思い出して、ルイクはまた重々しくため息をついた。

ため息をつく度に幸せが逃げてしまうのだとフェンライトから言われたことがあったが、そんなものは今更だ。

兄様、早く帰ってこないだろうか…

そう思って視線を上げた、その時。

「？」

窓を、何か黒いものが横ぎった。数瞬遅れて風が吹く。

さっきよりも少しだけ激しく髪と短いドレスの裾が揺れた。

「なんだったんだ…？」

黒いものがなんだったのかはわからない。

しかしどこことなく不吉な予感がして、ルイクはそそくさと窓を閉めた。

まだ夜明け前だ。もう一度寝直すのでもいいかもしれない。

そう思ってルイクが振り向く。

すると、そこには、

「ッ!？」

カラスの濡れ羽のように黒いローブを纏った人影があった。
部屋の影の中に、より一層影が出来たかのように、気配もなく、ひそやかに。

しかしその人影はまったく見知らぬ者ではなかった。

「フェン兄様…？」

掠れたルイクの声が、その影の名を呼んだ。

優しい顔立ちに銀灰色の瞳、まるで静かな湖水のような青い瞳。
どれも全て見間違えるはずのない、リーヴル家の長兄、フェンライトのものだった。
だがその瞳は死んだように光がなく、いつものような笑みも浮かべていない。

「…にい、さま？」

ほんの少しの、一抹だけの不安。

何かが、何かがおかしい。

フェンライトはそんな不安げなルイクに、いつも通りの優しい笑顔で笑いかけた。

それはいつも通りの、いつもと変わらないフェンライトのものであった。

「ルナイリス」

まるで魔法のように、フェンライトの声がルイクの耳の中で鳴る。

「ルナイリス、迎えに来たよ。」

そう言って、白い手を差し伸ばされた。

どうしてここにフェンライトがいるのだろう。

父と一緒にグレセア領に行ったのではないのか。

そんなことを不思議に思いながらも、口には出せずにいた。

「ルナイリス」

名前を呼ばれる度に思考力が低下する。

何も考えられなく、考えたくなってしまう。

「さあ、おいで。…ルナイリス。」

白く冷たい指先が、ルイクの頬に触れた。

急速な眠気に襲われ、それに逆らえず瞼が落ちてくる。

そして意識がシャットダウンする直前に、

「ルイクッ！」

はっと意識が覚醒した。

頭はまだ重いけれど、先ほどまでの眠気はない。

声の主、レグは腰から幅広の長剣を抜くと、そのままルイクの目の前の、無表情なフェンライトへと斬りつけた。

「れ…っレグ!？」

よろけて尻餅をついたルイクが、レグの信じられない行動に悲鳴のような声をあげる。

フェンライトは軽々とレグの剣を避けると口元に冷淡な笑みをたたえた。

「何のつもりだい？レグ。」

レグはルイクの前に、ルイクを庇うようにして立ち、鋭い視線をフェンライトに向けた。

「お前こそ、どういうつもりだ、フェンライト。」

レグの声音が、やけに冷たくピリピリとしている。

「グレセア公とその子息、そして…リーヴル公を殺害するとは」

ルイクが目を見開く。

兄は、そう、今日の昼にグレセア公と会談するために父と一緒にグレセア領に向かった。

到着するのは早くても明日の夕方のはずだ。

そんなこと、出来るはずがない。レグの思い違いだ。

しかしフェンライトは何も否定しない。

ただ、くつくつと嘲笑《わら》っているだけだった。

「フェン…兄…さ…?」

縋るようにフェンライトを見るルイク。

そんなルイクに、どこか冷めたような視線を向け、フェンライトは一層笑みを深くした。

「何を驚いているんだい、ルナイリス？」

フェンライトの声が、酷く希薄に聞こえる。

世界が、遠くなる。

無意識に頬に涙が伝った。

フェンライトが…優しかった兄が、父とグレセア公たちを殺した？
嘘だ。これはきつと夢の続きなのだ。

人を傷つけることが嫌いな兄が、人を殺めることなんて出来ないに
決まっている。

きつとこれは、悪い夢なのだー…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4553z/>

Lost Refrain

2011年12月21日21時50分発行